

1880年代教育史研究会ニューズレター

2003年3月5日 第4号

『明治天皇紀』とその史料（1）

福井 淳

明治天皇の公伝であり、明治時代の政治的、社会的通史としても知られる『明治天皇紀』は、1914（大正3）年12月に宮内省に設置された臨時編修局、次いで16年に改称された臨時帝室編修局によって編修が行われ、33（昭和8）年に完成した。

局名に「臨時」を冠したのは当初の計画が5カ年であったから。なお「編修」とは耳慣れないが、編纂と同義語で、宮内省・宮内庁では伝統的にこの語を使う。私の職場も書陵部編修課なのである（その特殊な名称のおかげで、日常的に「編集課」と誤記された郵便物を受領している！）。この臨時帝室編修局、通称臨帝は、明治天皇の「伝記であると同時に国史」を編むという壮大な編修方針を立てて、数十名の局員で事業を進めていったが、編修期間は紆余曲折を経て20カ年にも及んだ（歴史編纂事業がいかに遅れるかは皆様もよくご存じでしょう）。

その間に関係した方々の顔ぶれをみると、総裁には土方久元・田中光顕・金子堅太郎、副総裁には藤波言忠（侍従・主馬頭）、顧問には山県有朋・大山巖・松方正義・井上馨・西園寺公望・徳大寺実則（侍従長・内大臣）ら。編修官長（編修責任者）には竹越与三郎（歴史家・文筆家、枢密顧問官）・三上参次（歴史家、東大教授）ら、編修官（編纂・執筆者）には重田定一（歴史家、広島高師教授）・池辺義象（歴史家、一高・女高師教授）・幸田成友（露伴の弟、歴史家）・渡辺幾治郎（歴史家、明治政治史や大隈の実証研究の先駆者）・本居清造（宣長の曾孫）ら、編修官補には深谷博治（歴史家、早大教授）らが就いており、維新の元勳・新政府の実力者や天皇側近者のもとで、地味ではあるが堅実な歴史家たちが腕を振るったことが判る。

もちろん時代的にも、国家的な編纂体制から言っても、今や古色蒼然たる王政復古史観、天皇・皇室中心史観に拠った書である（意外に民権運動には目配りがしてあるが）。しかしながら、編修にあたってはとくに史料蒐集に力を入れ、天皇と総裁・顧問らの絶大な威光を背景に、史料採訪先は明治天皇旧蔵文書を始め諸省官庁、元勳・重臣諸家等の全国1,000カ所以上、借り入れ史料（原則として写本・抄本を作成し、原本は返却）の総数は約64,000件にも達したという。天皇紀編修に限って複写が許された史料も少なからずあり、また大震災・戦災や戦後の混乱によって、その後原本が失われたものも多い。その意味で『明治天皇紀』には、貴重な近代史料をふんだんに使った、情報の宝庫としての今日的価値があることは否定できないだろう。

『明治天皇紀』は完成後永らく秘蔵されていたが、「明治百年」を記念し公刊することが政府決定

され、67～77年に本文全12巻・索引1巻にまとめて吉川弘文館から上梓された。なお2001（平成13）～02年には、名称の誤記等数十カ所を編修課で校訂した新版が出された（私も関与したが、マア旧版で十分かな）。

さて、編修のために蒐集された肝心の史料はというと、臨帝解散後の39年に図書寮に移管され、現在は図書寮の後身である書陵部が約2500点を「臨時帝室編修局本」、通称「臨帝本」と名付けて所蔵している。これらは宮内庁書陵部編・刊『和漢図書分類目録』増加一（69年）でほとんどが検索可能である（一部非公開）。目録に（臨帝）と明示してあるものが臨帝本に当たる。また同目録刊行後の新規公開分は、毎年1回発行する宮内庁書陵部編・刊『書陵部紀要』の、第23号（71年）以降の彙報欄中に、公開の都度「新収本」として掲載している。同目録も紀要も主要な図書館で閲覧可能である。なお整理済みの史料を「本」「図書」と称することも伝統で、これは整理時に史料にも表紙を付して和綴にするため、図書の形態となることによる。

外国人教員雇用態勢にみる

第三高等学校前身校の1880年代

田中 智子

1880年代の第三高等学校前身校は、大きくいって前半（1880.12～1885.7）が大阪中学校時代であり、後半（1886.4～）が第三高等中学校時代である。その間に、約9ヶ月で命運を終えた大学分校の時代が挟まっている。1880年代教育史の枠組を三高前身校に即したところで再考することとは、この大学分校の性格ををどのように評価するのかという問題になる。雑駁ではあるが、この問題を外国人教員雇用態勢という側面から考えてみる。

大阪中学校時代には外国人教員がすべて解雇されていたが、大学分校は外国人教員の再雇用を構想した。校長の折田彦市は、駐米公使九鬼隆一の手を通じ、スミソニアン協会のスタッフを2名確保した。海外からの直接雇用という方法は、大阪中学校以前すなわち大阪専門学校の時代の方策と通底している。1879年から1880年にかけて、大阪専門学校の服部一三、続く折田彦市は、在英留学生監督の正木退蔵に人選を依頼し、医学専門教育を施し得る人材をイギリスに求めていた。この発想はかつての留学体験に基づいていると想像できるが、外国人教員に対して質の高さを要求していることを示しており、かつ学校の独自性を強く表わしているといえる。

質の高い外国人教員といっても、漠然とした「質の高さ」を指摘するのではなく、どのような領域における質の高さを要求しているのか、ということ踏まえねばならないだろう。大阪専門学校時代には医学専門教育そのものが求められていたが、大学分校時代の「質の高さ」とは語学教育における

それであり、第三高等中学校にも引き継がれていった。スミソニアンから確保した人材が赴任する前に大学分校は改組を迎えるが、文部省の許可の下、彼らは第三高等中学校に引き続き雇用されている。より高度な専門教育を受けるために必要な語学力を習得させることが外国人教員に対して期待される時代が、大学分校時代に始まったのである。

すなわち大学分校の外国人教員雇用態勢とは、人選の方法（学校独自の選択基準によって「質の高さ」を求める。それがつまり海外からの直接雇用である）において1880年以前との共通性を帯びているが、求める役割（専門教育から語学教育へ）の点では隔絶しているといえる。

いずれにしても、大学分校時代に外国人教員雇用の道が再び開けたことは事実であり、それが学校とキリスト教界とを再び結びつけることになったことも確かである。大学分校の日本人クリスチャン教員は、久しぶりの外国人教員がクリスチャンであることに大きく期待を寄せていたし、第三高等中学校時代になると在阪宣教師のギュリックが雇用され、彼の力で校内に第三高等中学校基督教青年同盟会が誕生するのである。官立学校とキリスト教界の関係という自分の関心から捉えると、今のところ、1886年誕生の第三高等中学校よりも1885年に発足した大学分校の画期性を強く感じている。

以上に関連する論考が「明治前期の官立学校における外国人雇用—第三高等学校前身校を事例に—」（『洋学』第11号 2003年3月）ですので、もし機会がありましたらご覧いただけますと幸いです。

1880年代の学校生活についての関心

富岡 勝

第1回研究会では、「1880年代を通じて、学生・生徒（大学、高等中学校など）の学校生活がどのように変化したのか」というテーマを設定して、この研究会における私自身の問題意識について報告した。この報告内容を簡単にまとめておきたい。

これまでに、1888年から1893年まで第一高等中学校の教頭・校長をつとめ「籠城自治」を提唱した木下広次の教育方針を分析したことがある。木下の方針は、学校外の社会一般からの影響から生徒を遠ざけるとともに、学校内で生徒が寄宿舎や校友会活動（課外活動）などの「自治」活動を行なうという新たな学園生活を提唱したことに特徴がある。一高に代表されるような、生徒の「自治」活動による学園生活というスタイルが1880年代終わりから1890年代にかけて高等中学校および高等学校にひろがっていったと考えられるが、これが教育政策、制度、実態とどのような関係を持つのかを分析していきたいと考えている。

たとえば、木村直恵『＜青年＞の誕生 明治日本における政治的実践の転換』（新陽社、1998年）では、1880年代末ごろに「青年」にアイデンティティを求める若者たちが登場したことが指摘され

ている。この研究によれば、雑誌『国民之友』などの影響を受けてヨーロッパ流の道徳を内面化しそれを体現した人物になることを目指す「青年」を自認する若者たちが、それまでの自由民権運動などの政治的実践からは距離をとりながら、雑誌刊行、「青年」結社の結成、「青年」の理想的「ホーム」としての同郷寄宿舎づくりなどの活動を行っていったという。

こうした「青年」たちは、地方の若者たちの間に見られる当時に、高等中学校や帝国大学内の文学結社などにも存在しており、両者は同郷青年会や雑誌などを通じて交流もおこなっていた。「青年」の登場は、社会的な出来事であったと同時に中等・高等教育の実態とも密接な関連を持つものであるといえるかもしれない。

たとえば先述の木下広次も「籠城自治」を提唱した演説のなかで、「青年」を意識した言葉を述べているが、木下などの学校管理者の言説や生徒・学生の実態を「青年」論などとの関わりを検討していくことで、より広い視野から学生生活の変化を検討していくことができるのではないだろうか。

以上のような問題意識から、政策担当者・教育行政関係者・学校管理者・教育者などの言説や生徒・学生の実態と、「青年」概念などの社会的な文脈との関連を分析していく作業を行っていきたいと考えている。

佐藤秀夫先生の御逝去を悼み、

謹んで御冥福をお祈り申し上げます

1880年代教育史研究会

荒井 明夫

既に皆様方御存じのように、佐藤秀夫先生は、2002年12月14日午後4時40分、肝臓ガンによりお亡くなりになりました。これまでの佐藤先生の御指導に心から感謝申し上げ、御冥福をお祈り申し上げます。

今年は、私ども80年代研究会にとりまして、実に悲しい年になりました。2月、京都にて待望の第一回研究会を開催できたのですが、その直後に中野実代表が逝去、そして年末には佐藤秀夫先生を失うことになりました。

佐藤先生は、当代の碩学として近代日本教育史研究に大きな足跡を残されましたことは既に御存じのとおりです。

私は、本年7月28日、病気と闘っておられる佐藤先生のお見舞いに出かけました。大変な暑さの日でした。その時、頂戴した御助言は終生忘れることができない程貴重なものでありました。そればかりか、私ども研究会にとって非常に貴重なものであると判断します。

ここに先生の御助言を詳しく紹介させて頂くことが私の義務であると思いこの一文を認めました。

1、80年代研究会までの佐藤先生との関係を簡単に整理しておきます。

私が大学院に入学し、寺崎昌男先生に指導教官をお願いし、本格的な日本教育史研究の道を歩み始めたのは1984年でした。修士課程1年の時、当時国研におられた土方苑子先生のプロジェクトをお手伝いすることになり、佐藤先生に御挨拶することになりました。

当時の佐藤先生は、学会では舌鋒鋭く発言され、大学院生の、まさに恐怖の存在でした。

私も初対面で「東大の院生は生意気な人間が多い」と言われ、たじたじになったことをよく覚えています。

この時はわかりませんでした。今にして思えば、佐藤先生の厳しさは、「先生御自身の学問研究に対する姿勢」と同時に「タックスペイヤー」に対する義務感から生じているものだったのだと思います。

以前先生は、「恵まれた環境の中の知的怠惰」という厳しい言葉で東大の院生を評されたことがありました。その真意は、「私学の大学院生の苦勞に共感している」からこそ恵まれた東大の大学院生には厳しくなる、と聞いたことがあります。

先日の御葬儀の際、隣に座った奈須恵子さんに「厳しい佐藤先生を御存じですか」と聞いたところ彼女は御存じでないとのこと。恐らく、私のすぐ下の方々が佐藤先生から厳しく言われた最後の世代だと思います。

厳しかった佐藤先生の語録の一部を紹介してみます。

東大の院生の研究スタイルは、東大—民研—教科研ライン上にいる研究者しか視野にいれていない

『——という視点からの研究は無い』と断言する知的傲慢さ

無批判に先行研究や史料集に依拠しているため、同じ過ちを繰り返すおそまつさ

等々。

余談ですが、私が教育史学会で発表した時、佐藤先生が発表会場にこられることを想定して準備したことを思い出します。先生が会場におられるだけでその会場には緊張感がみなぎっていました。教育史学会の発表を重ねるうち、私は、「いつしか佐藤先生に聴いて頂きたい」と思うようにもなりました。それほど会場はいい意味で緊張していました。

日大に着任された頃からだと思いますが、「厳しい佐藤先生」のイメージが、私の中で徐々に「学問的な厳しさを保ちつつ若手には極めて暖かい指導をして下さる先生」へと変化していきました。

また、教育学会や教育史学会のプログラムに「近刊・佐藤秀夫著『学校と教育の文化史全三巻』』という案内を見たことがあります。佐藤先生にお尋ねしたところ「国研時代の経験で、どうしてもタックスペイヤーの為の仕事優先してしまう。自分の仕事は後回しなのでなかなか出ないのです」と笑いながら答えておられました。

2、次に、わが80年代研究会に佐藤先生が参加される経緯です。

故中野実さんと森研究を開始したのは、既にニューズレター創刊号に書いたように今から2～3年前のことです。「森のアンビバレントな側面をいかに捉えるのかが最大の課題」と佐藤先生は激励して下さいました。中野さんが亡くなられ、葬儀も終え、本研究会ニューズレターの発行を終えた6月8日土曜日、突然佐藤先生からお電話を頂戴しました。「1880年代研究会に御一緒させて頂きたい」という感激的なお申し出でした。「中野君や荒井君が80年代に着眼したのは森文政を80年代の連続性として捉えようとする意図。80年代前半は初等教育にとっても構造転換の時期だから。」と仰っていました。私たちの第二回の研究会は、中野家の御協力の下、中野さんの遺影に囲まれて6月28日に大東会館で開催しました。そこには佐藤先生も御出席になられるという通知を頂き感激するとともに緊張して当日を迎えました。

ところが、結局先生は欠席されました。御病気の再発かと恐れたのですが、谷本さんが後日確認したところ、大学院生の指導に熱が入ったあまり、研究会のことはすっかりお忘れになっていたようでした。いかにも佐藤先生らしいと思いました。

3、冒頭で書きましたが、猛暑の7月28日、お見舞いに参上致しました。

先生は、なんと書き上げられた原稿に目を通されておられました！。虎ノ門病院分院の新築中の建物をみて、近い内にあちらに「引っ越しをする」と言って、あのいかにも先生らしい笑い声を響かせておられました。お疲れになるのではという私の心配をよそに、約40分お話されました。それは大変貴重な御助言でした。

第一に、80年代前期、初等教育政策の展開によって、地域の初等教育への就学行動はいかに規定されたのか、つまり80年代の初等教育の構造は70年代のそれと大きく転換する、という点でした。私自身、就学告諭研究会の一員でもあり、先生のご指摘は、80年代と70年代の連続と非連続という極めて重要な指摘でした。折しも、三日後には日本教育史研究会主催サマー・セミナーにて、私自身、就学告諭研究会の一員として発表する予定であり、しかもテーマが先生御指摘の部分に関わるだけに非常な刺激を受けることができました。そのことを申し上げると、先生は大変興味と関心をもたれているようでした（ちなみに先生にはセミナーでの全ての史料を送付させて頂きました）。

御存じのように、先生は、この問題に関して国研百年史に御執筆なられた箇所以外に二本の論文、すなわち「義務教育制度の成立と子どもたち」（『法学セミナー増刊号 教育と法と子どもたち』日

本評論社・1980年所収)および「教育史研究の検証」(『教育学年報6教育史像の再構築』所収)をお書きになっておられます。私が伺ったお話では、先生御自身がこの論文で解明された政策展開を踏まえ、さらに大きなスケールで初等教育史を構想されていたと思われます。

第二に、森一井上文政への転換点として、1890年2月の地方長官会議のもつ重要性を指摘されました。先生のご指摘は、「この会議への先行研究の言及は、厳密な史料批判を経ているものではない。数段階の決議文があり、先行研究はどれに依存しているのか不明である。教育勅語への道として位置付けられることの多い会議だが、もう一度厳密に検証すべきである。とりわけ、この会議で師範教育批判が展開されており、その批判はそのまま森文政批判に連なるものである。いろいろな意味でこの会議に関する再検討が必要である」と指摘されました。

この御指摘は、80年代の教育政策の延長上に位置付く森文政が、同時に90年代にいかに転換していくのか重要な示唆であると思われます。私たち研究会としてこの指摘を重要な課題として受け止めねばならないと思います。これに関連して「もし森が生きていたら教育勅語発布はありえなかったろう」とする御指摘にも深いものを感じました。

お話を聞いていて、本当に胸がわくわくするような思いでした。中野さんの時もそうでしたが、少しでも激励になればと思いお見舞いに訪れたのに、却って私が励まされたのでした。病院を失礼するとき、「大学で忙しいのに若い大学院生を巻き込んでよく研究会を組織されました。」と、佐藤先生からはじめて褒められました。病室の前まで歩いて、そこで先生が「荒井さんのようなダイジンプツにわざわざ来て頂いたのだからお見送りしなければ」と仰って下さいました。その時、言うまでもないことですが、「先生の仰るダイジンプツのダイは、太いという字のことですね。太いの点がとれるようダイエット頑張ります」と言いましたところ、またあの佐藤先生らしい豪快な笑い声が響いていました。

私が見舞った数日後に退院すると仰っていました。しかしそのとき、「遅れている原稿を書く。史料を確認する。院生の指導をする」と仰っておられ、退院後の生活に「休息」というお考えは微塵もなかったようです。少しでもお休み下さいと申し上げたのですが。

不安と心配は秋の中央大学で現実化してしまいました。教育史学会に参加されるどころかコロキウムにまで力を出されました。文字どおり力を振り絞って渾身のエネルギーを発揮され倒れられたのでした。その教育史学会の懇親会でお話しました。

ご闘病のことについてお話された後、「80年代研究会のニューズレターは楽しみです。」と仰って下さりました。私が「頑張って発行を続けます」と申し上げたところ、それまでの笑顔が消え、「本当に大事です。頑張ってください」と励まして下さりました。これが、私と佐藤先生との最後の会話になってしまいました。

7月の病院で聞いたお話を思い出す時、佐藤先生がお元気ならば、壮大なスケールの教育史が書かれたであろうことは想像に難くありません。これまでの先生のお仕事、まだまだお若い68歳という年齢で倒れたことを考える時、私たちの失ったものの大きさは語り知れないと思います。

私たちは、中野さんの抱いていた志と佐藤先生が思いを寄せていた壮大なスケールの教育史の再構成を、私たち自身の課題として引き取りたいと思います。それは、1880年代教育史像を、70年代・90年代との連続・非連続を視点に、80年代の政治史経済史の豊かな成果を吸収しつつ、初等教育・中等教育・高等教育と高等専門教育の統合及び師範教育の各領域ごとに丁寧に先行研究を批判的に検討し、史料を読み直す作業だと思えます。

中野さんを失った時、意志を継いでいこうと私たちは決心しました。今再び佐藤先生を失って、ともすると私たちは連続した悲しみの中で頭を下げたくなることもあります。中野さんを失った時以上の私たちの不退転の決意をもって、再び、意志を継いでいくことを固く中野さんと佐藤先生の御霊前にお誓いしたいと思います。

悲しみを乗り越え共に進んでいきましょう。 (2002年12月24日記)

HPのお知らせ

本研究会はニューズレターによる情報交換が主体ですが、緊急の告知や紙面にとどめるまでもない軽微な話題提供など、ニューズレターではカバーしきれない部分を補足するため、1880年代教育史研究会のホームページを仮設しております。ホームページのURLは下記のとおりです。

[Http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/index.html](http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/index.html)

機会がありましたらどうぞお立ち寄り下さい。ご意見等お待ちしております。

なお、一般掲示板はどなたでも自由に入ることができますが、会員専用掲示板に入るにはパスワードが必要です。パスワードについては小宮山までお尋ね下さい。

編集後記

第4号をお届けいたします。前号の発行から間がないため、今回は第3号に執筆されなかった会員を中心に編集いたしました。荒井会員による佐藤秀夫先生の追悼文は、会員には昨年末に郵送していただきましたが、改めてニューズレターに掲載させていただきました。次号にむけ、会員の皆さんの原稿をお待ちしております。3月7日・8日に開催される第3回研究会の感想なども、どしどしお寄せください。(富岡)

<研究会連絡先>

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1

大東文化大学荒井明夫研究室気付 「1880年代教育史研究会」事務局

<ニューズレター原稿送付先>

〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部富岡勝研究室

e-mail : tomi2001@fmail.plala.or.jp (e-mailによる投稿も歓迎)